家婦の京に在す尊母に贈らむために、誂へられて作る歌一首　并せて短歌

四一六九番

ほととぎす　来鳴く五月に　咲きにほふ　花橘の　かぐはしき　親の御言　朝夕に　聞かぬ日まねく　天離る　鄙にし居れば　あしひきの　山のたをりに　立つ雲を　よそのみ見つつ　嘆くそら安けなくに　思ふそら　苦しきものを　奈呉の海人の　潜き取るといふ　白玉の　見が欲し御面直向かひ　見む時までは　松柏の　栄えいまさね貴き我が君

反歌一首

四一七〇番

白玉の　見が欲し君を　見ず久に　鄙にし居れば生けるともなし